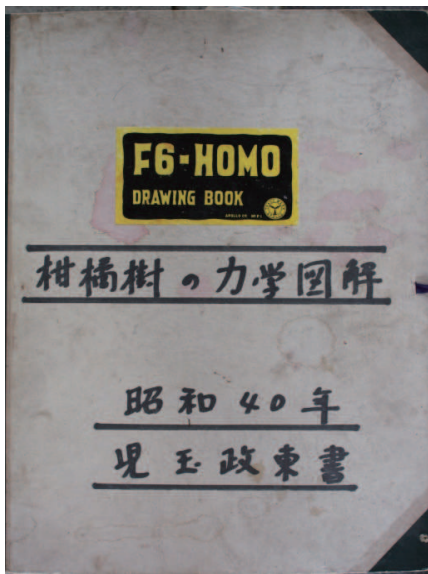


四代目が伝えたかったこと



先日、古くからあるみかんの貯蔵施設を整理してありますと、昭和40年に当園四代目が書いた二冊のスケッチブックが出てきました。

題名は「柑橘樹の力学図解」と「計画的密植栽培及び八朔樹の整枝剪定図解表」というものでした。

この内容が記された昭和40年代は、みかんの価格が高く、昭和50年代初期の全国生産量400万トン生産量に向けて、九州や四国地方でみかん園地が急拡大した時代でした。

この資料は、いかに多くの量を生産するかに力点が置かれていました。

みかん価格の長期の低迷で当時の生産量の1/4を切る今の時代、量より質への転換が必須となってきています。

私（5代目）が実家のみかん農家を継いだ昭和47年は、みかんの生産量が200万トン突破し、みかん農家が初めて経験する価格の大暴落の年でした。

その後、当園は大きな構造改革を迫られ、

新品種の導入、レモン、デコポン、はるみ、太秋柿など卸売市場販売から直接お客様にお届けする販売へ変化していきました。

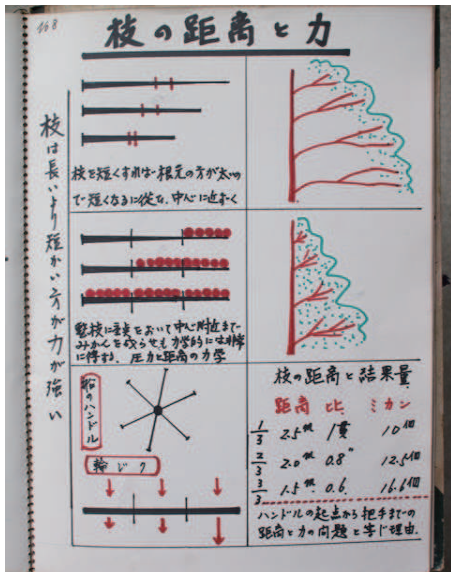
お客様ニーズに合わせた多品種栽培に向けての、あくなき品種更新の時代でした。

この資料、「みかん御殿」が建ったと言われるみかん栽培の良き時代のものであり、すべての農業分野で生産者が増産意欲に燃え、日本農業全盛期の頃のものであると感じます。

今の時代、反面的な要素はありますが、既成概念に縛られない「時代の先取り」の必要性を示してくれる、貴重な祖先の知的財産として感慨深く読みました。

こうして今当園が存在出来ているのも、先祖の絶え間ない創意工夫のおかげですので、私達も先祖の想いを胸に励んでまいります。

観音山フルーツガーデン
五代目 児玉典男



昭和47年 観音山 児玉典男 26歳